

褒めの返答に対する褒め提示側の印象度分析

鈴木 理 恵

1. はじめに

言語行動は様々な状況下において、文化や社会の持つ価値観を映し出しているが、その一つに「褒め」がある。これまで日本には「謙虚さ」を美徳とする文化があり、その価値観は褒めの返答にも映し出されていると説明されてきた。褒め言葉とは拒否すべき言葉であり、拒否されて初めて、褒め言葉の持つ「上下関係の確認」という役割は果たされるわけであり(東 1994)、相手より自らを低く配する控え目な返答態度がなされてこそ、褒めの提示側に「できた人」と思わせることが可能だ(熊山 1991: 94)とする主張である。だが褒めの実証的研究においては日本語母語話者は褒めへの明確な返答を回避し、曖昧に褒め的话题を終わらせる傾向が強いという結果も出ている(横田 1985、丸山 1996)。無論これらの研究結果が示す「曖昧な返答」への傾向の高さを日本語母語話者が「曖昧さ」に最も好ましい価値を見出しているという解釈に置き換えることは出来ない。実際の表現選択は発信者の属する文化や社会の価値観や個人が好ましく思う価値にのみ直結しているとは限らないのである。

外国語学習者にとっては、学習言語の母語話者や彼らの文化・社会における価値観を知ることが極めて有用である。母語話者はその文化や社会の持つ価値観に対し、意識的・無意識的な認知を行って言語表現を選んでいるはずだが、外国語学習者がその「価値観認識」を習得することは容易でない。勿論、自分の考えや感情に即していると判断して選択した言語表現が、相手側に意図に反した解釈をされてしまい、その結果、両者間の対人関係や意思疎通に誤解が生じるということは、異文化接触に限らず起こりうる。しかしながら異文化接触時に生まれた誤解は、その解釈段階で文化や社会が独自に持つ価値観のフィルターを通して分、母語によるコミュニケーションの場合よりも、誤解解消に際してさらに多くの説明や努力を必要とさせる。外国語学習者が誤解による摩擦の少ない、効果的な意思伝達を目指して、自分自身にも相手にも不都合のない、適切なストラテジーを選択・運用できるようになるためには、母語話者の言語行動の実態同様、母語話者の価値観認識と言語表現の関係が明らかにされることが有益である。

しかしこれまでの褒めの研究では、テレビ番組や実際の会話からデータを収集したり(寺尾 1996、丸山 1996)、コーパスを使用して現状の言語行動の傾向を探るもの(Holmes 1987, 88、Herbert 1990)の他、インフォーマントに「褒め」や「褒めの返答」を発信させる状況を提示して、どのような発話を行うかを問う実験やアンケート調査(横田 1985)等が

多く、受信者の返答に対して発信者が持った印象や満足度の研究など、発信された言語表現に対する受信者側の解釈に焦点をおいた調査は少ない。コミュニケーションが聞き手の解釈を含めて初めて成立するという立場に立てば、「発話がどのように解釈されたのか」というところまで追いかける、解釈主体の研究には意義がある。

本論は以上の考えに基づき、褒めの返答に対して、褒め提示側がどのような印象を抱くかについて調査・分析を行い、発信者解釈主体という新しい視点を提示する。これは現在、日本語の褒め行動で、褒めの提示側がどのような返答ストラテジーを好むのか、謙虚さの感じられる返答や曖昧さの残る返答は提示側にとって「感じの良い」返答であるのか、それぞれのストラテジーは褒め提示側にどのような印象を与え、解釈されているのかといった点を明らかにしていくための基礎研究である。尚、解釈分析に際しては米語における褒め返答との比較的視点も合わせ持つものである。

2. 論述基盤

2.1. 「褒め」の定義と機能

「褒め」は、「肯定的評価を伴う支援行為」(熊取谷 1989)、「感情伝への理解要請行動」(川口 et al.1996)、「認可・同意行動」(田辺 1996) など様々に定義付けられてきたが、中でも Holmes (1988) は「褒め」行動の拡大定義を以下のように簡潔に述べており、本論ではこの Holmes (1988) の定義に倣うことを妥当とした。

A compliment is a speech act which explicitly or implicitly attributes credit to someone other than the speaker, usually the person addressed, for some 'good' (possession, characteristic, skill etc.) which is positively valued by the speaker and the hearer.

(Holmes 1988: 446)

「褒め」の機能もまた各研究者によって様々なレベルで論じられている。Herbert (1990) は「褒め」の多機能性を主張し²⁾、Wolfson (1983) は「褒め」がお祝い、謝罪、感謝、和らげた批判などのコンテキストでも機能すると説明する³⁾。熊取谷 (1989) もまた、「褒め」が反論や批判の緩和、会話開始、皮肉、依頼の成功といった、他の目的を達成するための支援的行為として機能していると主張する⁴⁾。しかし「褒め」が基本的に発信者と受信者の人間関係及び連帯感の維持・強化といった社会的潤滑油 (social lubricants) としての働きを主機能とする点は、多くの研究者間で同意が見られる⁵⁾。勿論、「褒め」の主機能自体に明らかな日米差があるとする見方もある。東 (1994) は日本語の「褒め」が発信者と受信者との“上下関係確認”であることに比べ、米語の「褒め」は人間関係上の距離縮小を目的とした“思いやり”が基盤になっていると主張している。しかしながら「上下関係を明確にする」ことも「人間関係上の距離も縮める」ことも、いずれも結局は発信者 — 受信者間の人間関係を強化しようと

いう目的は共通している。どのような言語表現や態度が人間関係を円滑にするかはその言語圏の文化や社会によって異なり、「褒め」はこうした文化・社会の持つ価値観背景を映し出す鏡でもある (Manes1983)。このような立場から本論は「褒め」の主機能が「社会的潤滑油 (social lubricants) 的な働き」であるという主張に賛同する。

2. 2. 褒めの返答に関する日米先行研究の検討

2. 2. 1. 褒めの返答傾向

2. 2. 1. 1. 全体考察

褒めの返答に対する印象度⁶⁾を調査するにあたっては、褒めの返答に関する先行研究の立場を総合的に把握し、日米における褒め行動の構造を概観しておく必要がある。日米語間には「褒め」の定義や機能同様、返答傾向においても明らかな差があるとしている牧野 (1978)、熊山 (1991)、東 (1994) は、日本語の褒め返答では否定型が無標⁷⁾であるのに対し、米語の褒め返答では肯定型が主流であり、これは米語母語話者が褒めを「相手からさしだされた手」⁸⁾—つまり人間関係持続・強化の働きかけとして認識するために起こる状況であると述べている。日米両語それぞれの母語話者が持つ褒めや返答に対する認識・論理が異なるというのだ。

しかしながら日本語の褒め返答量的分析を行った寺尾 (1996) は、日本語での褒め返答が否定傾向にあると主張した牧野 (1978) や熊山 (1991) と相反する分析結果をもたらした。Herbert (1990) の米語褒め返答データと日本語データを比較した結果、打消型選択の出現率に日米間で大差はなく、さらに日本語データ内部に限れば打消型より受入型の方が多くあらわれる (寺尾 1996: 83)。ただし褒めを提示されたままの形で受容するのではなく、用いられた表現語彙を中立的或いは若干否定的なものに変換させて高慢な印象を避けたり、(例: 「上手」→「好き」「得意」/「我慢強い」→「鈍い」)、副詞を用いて限定肯定や縮小肯定の形をとったり (例: 限定の「だけ」「のみ」/縮小の「ちょっと」「少しは」)、褒めが予想外の評価であったという態度表明をする形 (例: 「結構」「案外」「割と」「一応」) をとることが多く、受容に消極性や躊躇を配する「謙遜への配慮」(寺尾 1996: 84) を行っている。調査で最も選択されていたカテゴリーは態度保留型 (回避・その他) で全体の4割近くを占め、受入型や打消型に比べて高い割合を示している。ストレートに褒めを受容しない様々な工夫は「謙遜への配慮」の結果であり、これが日本語の褒め返答スタイルの特徴と寺尾 (1996) は述べている⁹⁾。また田辺 (1996) は、返答ストラテジーの選択傾向に日米差があると指摘し、褒めが「相手に対する敬意」を、褒めの返答が「自画自賛を避ける謙虚さ」を要としていることが両言語において共通していると述べた上で、日本語の褒め返答には米語と比べて褒め提示側の意向を中心視する特徴があり、褒めの著しい規模縮小などが目立つとしている。以上から判断し、先行研究にみられる日米の褒め返答傾向は次のように表すことができる。

日：回避＞肯定・否定→回避策の充実／肯定も規模縮小などで配慮あり
米：肯定＞回避＞否定→肯定傾向が高い

2.2.1.2. 謙虚さ：「謙遜のストラテジー」の解釈

前項 2.2.1.1. では日本語による褒めの受け入れが「謙遜への配慮」から回避に傾くのに対し、米語では人間関係の持続・強化の働きかけとして、これを受容する傾向が見られると指摘した。ただ Pomerantz (1978) は米語母語話者が褒めを相手からの友好的な働きかけとして受容・賛同したいという理想の姿と、褒めを受け入れることで自画自賛になりたくないという現実との間で常に心理的葛藤を抱えていることに言及し、大多数の米語母語話者が褒めの返答時に自画自賛を防ぐための工夫を加えていると述べている。この心理的葛藤の存在は Pomerantz (1978) 以降も他の研究者達に賛同されており (Manes 1983、Wolfson 1983、Holmes 1987, 88、Herbert 1990)、実際、米語圏において褒めが公然と受け入れられることは少なく、褒めを避けるか減少させるかによって自画自賛を避ける返答ストラテジーが数多く存在するとも報告されている (Herbert & Straight 1987) ¹⁰⁾。

この心理的葛藤は日本語の褒めの場合でも同様に見られ、熊取谷 (1989) は謙遜原則の優先、自画自賛回避による受け入れ、問題解決の保留・回避（曖昧性や冗談の使用）等の存在を葛藤の打開策としているが、このような「謙遜のストラテジー」の解釈に関して Sakamoto (1982) は次のような興味深い論理を展開している。すなわち、日米両語圏において自画自賛 (self-praise) が失礼 (impolite) にあたるという点は共通しているが、日本の謙遜ストラテジーのように、褒めを正面から否定する形には、日米間で異なる解釈がなされる。日本語運用において「へりくだる」「相手をと比べて自分を低く評価する」という行動は基本的に失礼とはとられず、むしろ限りなく謙虚な姿勢と受け取られる。褒めを否定することで「礼儀や常識をわきまえた人だ」「控え目な人だ」という好感をもたれることはあっても、否定的な解釈をされることは少ない。しかしながらこのような「謙遜」は、米語運用では謙虚な姿勢の表れとは解釈されない。自分の劣性 (inferiority) を強調することは、丁寧さや礼儀正しさにはつながらないのである ¹¹⁾。米語圏ではコミュニケーションの相手と自分の間に対等性 (equality) を感じさせることが基本的な礼儀であり美德とされている (Sakamoto 1982: 5-8, Maynard 1997: 56)。自分を卑下して相手との社会的上下関係や能力の優劣を明確にすることは対等性の美德に反すると同時に、自分が卑下して作った関係を相手に補ってもらう — つまり謙遜する自分を褒め直して、平等な関係を再度作ってもらうことを要求しているように解釈されるのだ。

「謙遜」は日本の言語行動上では謙虚度が高いストラテジーだが、米語圏では謙虚であるとは解釈されないストラテジーであるらしい。褒めを受ける時は自画自賛にならないように配慮し、否定するときには正面切って否定しないのがアメリカ式の謙虚さであると東 (1994) は言う。何を謙虚と捉えるか、どのような要素が謙虚と判断されるかは文化や社会によって

異なっている¹²⁾。それぞれの謙虚さを表すための多くの方法が語彙レベル・ストラテジーレベルのいずれにも存在するのである。

2. 2. 2. 褒めの対象項目と返答傾向

返答傾向は文化や社会に求められる価値だけに影響を受けるわけではなく、褒め手や受け手の性別／地位にもまた影響を受けている。2. 2. 2. および 2. 2. 3. ではその諸要因との関わりについて整理していく。まず始めに褒めの対象項目と返答傾向との関係を見ていきたい。日米ではどのような事物・状態が褒めの対象とされているのか。Wolfson (1983) は米語での褒め対象項目は「外見 (所持品を含む)」と「能力 (技術、才能、人格、嗜好を含む)」が 2 大主要項目であると述べ¹³⁾、Holmes (1987, 88) はニュージーランド英語の褒め対象項目種類が米語と明らかに同じ傾向であるとした上で、「外見」と「能力・能力の結果」が約 8 割、その他に「所持物」や「性格」があると述べている¹⁴⁾。日本語での褒め対象項目については熊取谷 (1989) が①才能・知識・技術、②容姿・服装・所持品、③努力、④性格の 4 カテゴリーをあげている¹⁵⁾。カテゴリーの仕方に研究者間の違いはあるものの、日米の褒め行動の間には褒め対象項目の種類自体に大きな差は見られない。ただし米語の褒め基準に関して Manes (1983) が①結果を意図した努力によってもたらされた成果は高く評価される一方、身に付いている魅力への褒めは避けられる¹⁶⁾、②新しさが高く評価される¹⁷⁾、③才能は努力の上位にあるとされる¹⁸⁾と主張していることは注目に値する¹⁹⁾。

次に褒め対象項目と褒めの返答傾向の関係を見ていく。丸山 (1996) は日本語の褒め行動において、「所持物・外見」といった物理的な項目に対する褒めは受け入れられやすく、反対に「技量・性格」などの非物理的な項目に対する褒めは受け入れられにくいという分析結果を示した。そして非物理的な項目を「ほめの受け手の内面に (物理的項目に比べて) より近い」項目と明記して、受け手の内面に遠い [物理的項目]の方が内面に近い [非物理的項目]よりも褒めの受容がされやすいと主張している。しかし丸山 (1996) の調査データを褒め手—受け手間の地位差の有無という視点から見れば、先に挙げた【物理】対【非物理】軸と異なる返答傾向が現れている。これは両者に地位差²⁰⁾がある場合には [所持物・技量]に対する褒めが肯定されやすく、[外見・性格]に関する褒めが否定されやすい、また地位差が無い場合にはこれと対照的に [外見・性格]に対する褒めが肯定されやすく [所持物・技量]に関する褒めが否定されやすいという返答傾向である²¹⁾。褒めの対象項目と褒めの受容傾向との関係は、物理的か非物理的かというレベルでのみ捉えられるには複雑すぎるが、この問題に関する研究は現段階では極めて少なく、今後のさらなる調査・分析が待たれる。

項目と地位差の関連を視点に持つ見解は Wolfson (1983) にもある。彼は米語褒めデータの分析によって、褒め手—受け手間の上下関係が実際の項目選択に影響していると主張する。これによれば米語では、自分と同等の者または目上の者に対して褒める時に [外見・所持物]が対象として選ばれる割合は [技術・能力の結果]が選ばれる割合の 2 倍近くであり、反対

に自分より目下の者に対して褒める場合に「技術・能力の結果」が選ばれる割合は「外見・所持物」が選ばれる場合の2倍近い。目上の者は目下の者を褒めて評価したり、励ましたりすることを社会的にも期待されており、そのような立場が対象項目の選択傾向に影響した結果であると説明されている。褒めの対象項目選択には社会や文化の価値観が反映されている (Holmes 1988: 503) のと同様に、相手との上下関係に適した褒めの対象項目も社会や文化によって異なる場合がある。

2.2.3. 褒め手 — 受け手の性別と返答傾向

最後に褒め手や受け手の性別が返答にどのように関わっているのかについて詳しい Herbert (1990) に触れておきたい。彼によれば米語の褒め返答傾向は褒め手の性別が鍵になっており²²⁾、褒め手が男性の場合、受け手は褒めを肯定受容する傾向にあり、褒め手が女性の場合は、褒めが明確には受け入れられない「肯定非受容型」が選択される傾向にある。褒め手の性別が偏った返答を引き出すのは男女の間で褒めの頻度と褒め自体の認識のされ方が異なるためで、男性における褒め行動はその頻度が低いことから文字通りの褒めと解釈され、受け手も率直に受容する。一方女性の褒め発話はその頻度が高いため、第一に両者の社会的距離縮小のための手段として用いられているように解釈され、受け手もまたその意図を理解したという意味で褒めの肯定非受容を行うと論理づけられている。公然と褒めを受け入れないことで、褒め手と受け手の間の連帯意識を高める役割が果たされるというのである。

表 1 褒めの受け手の性別と褒めの頻度・機能・返答

	Male	Female
Frequency	Infrequent	Frequent
Function	Offer praise	Offer solidarity
Response	Acceptance	Nonacceptance

Herbert (1990) より

そもそも男女間には褒め行為自体に対する基本的認識差があり、これが返答傾向への差に繋がると指摘するのが Holmes (1988) である。彼によれば、男性は褒めを褒め手からの FTA としてみなす傾向を持つため²³⁾、褒め行為を人間関係の連帯意識を高める手段に用いることを好まず、例えば食事に招かれた時のような、褒めが社会的礼儀として必要とされる場合に限って褒めを行うとされる。また女性は反対に連帯感を高める手段として褒め行動は適切であると捉え、その結果として幅広いコンテキストで褒めを行っていると言われる。この女性の褒めの捉え方に対する Holmes (1988) の主張は Herbert (1989, 1990) から賛同を得ている。これに対し日本語での褒めの返答傾向を分析した丸山 (1996) は、日本語の褒めは会話者が同性同士であれば褒めは受け入れられやすく、異性同士であれば受け入れられにくいとして、褒めの返答傾向には褒め手と受け手の両者の性別が関連していると述べた。丸山の研究は、

これまでの日本語における褒めの研究のデータ不足を補う形で量的分析を目指したものが、米国での先行研究との比較を行うのに十分な基礎資料を提供しているとまではいい難い。また、褒めの頻度差や褒め自体に対する認識差と返答傾向の関係については、これまで全く研究されていない。丸山(1996)による日本語褒め返答傾向と会話者の性別との明確な関係は、褒めを頻度や褒め行動自体への認識とも関連付けた視点で分析していく必要性を感じさせる。

2.2.4. まとめ — 日米両語における「褒め」比較

以上、日米語における褒め行動に関する先行研究は次のように要約できる。

- (1) 褒めの返答傾向は、日本語においては肯定とも否定とも明確に返答をしない [回避型] が主流であり、肯定型と否定型はほぼ同じ割合でこれに続くものである。一方米語においては褒めを比較的率直に受け入れる [肯定型] が主流であり、これに回避型、否定型の順で続く。
- (2) 褒めの受け手には返答時に「自画自賛を避けたい」という謙虚な気持ちが働くという点は日米両言語の母語話者に共通しており、この謙虚さと「褒めを相手からの友好的な働きかけとして受け入れたい」という感情との間で起こる心理的葛藤を解消させるための多くの方法が両言語に存在する。だが「へりくだり」に代表される [謙遜のストラテジー] は日本語では謙虚さの表れであるが、米語では「平等性の美德」に反し、相手に心理的負担をかける返答に受け取られる。
- (3) 褒めの対象項目には、外見、所持物 (所有物含む)、能力、技術、性格等があり、日米の間で大差はない。
- (4) 褒めの対象項目は返答傾向に何らかの影響を及ぼす。また、褒め手 — 受け手間の地位差によって褒めの対象として好まれる項目は変動する。
- (5) 褒め手や受け手の性別は、返答傾向に何らかの影響を及ぼす。また、返答傾向差が男女の褒めに対する認識差や褒めの頻度に由来すると考えることもできる。

3. 調査方法

3.1. 調査計画・手続き

本研究は日本語での褒めの返答がどのように褒め提示側に解釈されており、どのような返答が提示側に好ましく思われているか／思われていないかを明らかにすることを目的とし、褒めの返答に対する褒め提示側の印象度についてアンケート調査を行った。調査は事前にインフォーマントに電子メールや電話で直接依頼し、協力の意向を示した者に対して電子メールによるワード添付という形で送付した。インフォーマントには添付したワードにそのまま書き込んでもらうという形で1週間以内に返信してもらい、回収後には各インフォーマントに対して、問題設定に対する不自然さの有無等に関する、フォローアップ調査を行った。その返信内容によっては再度各インフォーマントに褒めの返答に対する印象や好感度、褒めの言語行動に際して普段感じる事等について具体的な質問をし、返答を得た。フォローアッ

プ方法は直接のインタビュー形式・電話・電子メールを手段とした。以下に調査票及びフォローアップに関する詳細を述べる。

(1) 調査票

調査票は A4 サイズ 4 枚で構成され、最初の 1 枚が説明とフェイスシート、3 枚がアンケート部分となっている。フェイスシートではインフォーマントの年齢、性別、現在居住する都道府県・都市名、今まで最も長く居住した都道府県・都市名、使用言語・方言、海外滞在経験及び滞在国・都市名を記してもらい、その際に習得した言語があれば、その使用可能レベルについても記入を依頼した。

アンケート部分ではまず始めに、インフォーマントに同性で同年代の友人に対して褒めを行うという前提において、具体的な状況設定と褒めの対象が異なる褒め言葉 5 文を例示し、それらに対する友人の返答として想定される返答例をそれぞれ 16～19 種類提示し、返答例を「印象が良い」「普通である」「印象が悪い」の 3 段階の分類付けしてもらった。さらに中でも他の返答例に比べて特に印象が良い、特に印象が悪いと感じる返答例があれば特別に印をつけてもらうという、基本 3 段階・最大 5 段階の分類をしてもらった。設定した 5 つの具体的な状況と褒め言葉は以下の通りである。

- ① 朝、職場や学校で会った時に、コート（所持品）を褒める。

褒め言葉：「そのコート、きれいな色だね。」

- ② 友人の旅行写真を見せてもらっている時に、写真（写真技術）を褒める。

褒め言葉：「写真撮るの、上手なんだね。これなんか、すごくいいじゃない。」

- ③ 友人の家に初めて行った際、部屋（所有物）を褒める。

褒め言葉：「眺めのいい部屋だね。」

- ④ 友人との普段の会話の中で、友人の毎日の水泳（努力・継続性）を褒める。

褒め言葉：「毎朝ジムで泳いでるの？ よく続くねえ、すごいね。」

- ⑤ 友人の部屋に招かれた時、ご馳走になった食事（料理・料理の腕）を褒める。

褒め言葉：「どれもおいしいねえ。料理、上手だな／ね！」

この 5 つの状況設定と褒め言葉、並びにその返答例をどのような基準で選定したのかについては、その選定過程、返答例に用いたスピーチレベル、語彙選択同様、後項 3.3 に詳細を譲る。

(2) フォローアップアンケート

調査票回収後、時間を置かずに各インフォーマントにお礼を述べ、同時にアンケート自体への不備や違和感、各インフォーマントの日常における褒めの頻度と対象項目、その他アンケート記入をしながら褒め行動や褒めの返答について感じたことについて、全インフォーマ

日常的な言語行動に関する調査

あなたが同性で同年代の友人を、次の 1 から 5 の太文字部分のように褒めたとします。その褒め言葉の返答として、あなたが「感じがよい」「印象がよい」と思うものに 1 を、「特になにも感じない」「普通である」と思うものに 2 を、「感じがよくない」「印象が悪い」と思うものに 3 を、全ての返答例の先頭部分にあるカッコ内にその数字を書き込んでいって下さい。あまり深く考え込まず、感覚的にお答え下さって結構です。また返答例の中で、他の返答例に比べて特に印象がよいものや特に印象の悪いものは、数字を○で囲んで下さい（複数可）。

* 返答例の中のでてくる、「○○」には、あなたの名前をいれて考えてみてください。

1. そのコート、きれいな色だね。（朝、職場や学校で会ったとき）

- () ありがとう！
() うん、気に入ってるんだ。
() 色いいよね。物は大事なことないけどさ。
() ○○のコートもあったかそうだな。
() そんなことないよ。
() そう？
() そう？ うれしいねえ。
() 何か頼み事でもあるわけ？ あやしいな～。
() 弟がくれたんだよ。
() しかも、すごくあったかいんだ。
() これ？ 先月、新宿で買ったんだ。
() でも着心地はあんまりよくないんだよね。
() 今日は何んだか雨降りそうだなあ。
() 店 4 件も回って探したんだ。
() ○○のコートの方がずっといいよ。
() きれいっていうか、あんまりない色だよ。
() ○○は、服とかいつもどこで買うの？

2. 写真撮るの、うまいだね。これなんか、すごくいいじゃない。

（友人の旅行写真をみせてもらっているとき）

- () ○○の方が、僕よりうまいよ。
() この間、違う友達にも腕がいいって言われたよ。
() 写真ぐらいしか能がないからね。
() うん、僕もいい出来だと思うよ。
() ○○は、夏、どこか行った？
() 本当に？ そう言ってもらえるとうれしいよ。
() 景色がいいからだよ。
() ありがとう！
() 割とよく撮れてるだろ？
() 今日、お昼どうする？
() そんなに褒めて、何か裏があるんじゃないの？
.
.
.

ントに共通のフォローアップを行った。調査方法は基本的に電子メールを使用し、文面に解釈上不明な点があった場合、再度こちらからメール、電話、インタビューなどで質問を繰り返し、インフォーマントの述べたいことが明確になったと判断できるまでこれを繰り返した。

3.2. インフォーマント

インフォーマントは国籍を日本とする日本語母語話者で、現住所並びに最も長く住んでいた都道府県を関東甲信越及びその近郊とする 22 才から 38 才の男女計 21 名（男 9 女 12）であり、職種や帰属する会社・団体などは一つに規定されていない。また全インフォーマントのうち米国滞在経験が 1 年から 3 年以上の者は 4 名（男 1 女 3）となっている。インフォーマントを 20～30 代に限定して依頼した一因は、予備調査として複数の高年齢層のインフォーマントに褒め行動に関するインタビューを行ったところ、褒め行動そのものに対するこの層特有の認識や習慣が確認された。すなわち高年齢層インフォーマントの談話内容によれば、褒め行動自体が普段の会話の中に殆どないということであった。つまり高年齢層にとってアンケートの状況設定そのものが不自然になる可能性が高くなることに加え、中年層において褒め行動への頻度や認識に変化が起こっているという推測が可能である。以上をふまえ、本論における調査が印象度に関する基礎調査であることや、少人数に対する定性的分析を目的としていること、また年代差の幅の広さが分析後の傾向認識に困難をおよぼす可能性を考え、ある限定された年代層を対象をしぼった。日本語における褒め行動自体への認識や頻度にどのような世代差が見られるのかについては、今後の研究課題としたい。

3.3. 調査票作成手順

調査表作成に際しては始めに予備調査（協力者男 2 女 1）を行い、協力者の日常に褒め行動が稀であり過ぎないかどうかを確認した後、褒められる相手との上下関係や性別や褒めの対象項目によって返答が変わると思うかどうかについて例を挙げながら尋ね、自分が相手を褒める際に褒めの対象として選ぶものや、実際に自身が褒められたことのあるものなど、具体的に思いつく限りをあげてもらった。この予備調査の結果をもとに、褒めの対象として選ばれやすいとされた項目リストや褒めに使われやすい表現リストを作成し、褒めによく用いられる表現や項目を研究対象とした小玉 (1993)、Holmes (1987, 88)、Wolfson (1983) も参照しながら、論者の内省も加えて、全インフォーマントにとって不自然でない状況の設定、表現の選択を行った。出来上がった状況設定と褒め言葉に対応する褒めの返答に関しては Holmes (1987, 88) と Herbert (1990) に見られる返答分類カテゴリーを参考に、新たに設定した独自の 17 返答カテゴリーに沿って表現例の作成を試みた（後項 4.2 参照）。こうして出来上がった仮調査票を用い、協力者（男 2 女 2）にアンケートを実施した。ここではアンケートで用いられている褒めの表現・状況設定・返答例に違和感や不自然さ、わかりにくさがな

いかどうかに注目しながら回答してもらい、褒めの項目として選ばれた具体例にインフォーマントの解釈によって大きな意味差を生む可能性がないかどうかを確認してもらった。不備を訂正し、返答例をランダムに並び替え、最後に調査票原稿を男性版、女性版に作り替える作業を行ったが、この作業後も再度協力者（男 2 女 1）の指摘をもとに言葉遣いの不自然さを調整した。尚、「褒め」は同世代間で最も起こりやすいという Holmes (1987, 88)、Wolfson (1983)、丸山 (1996) の主張と前項 2. 2. 4. (5) で明らかになった性別と返答傾向との関連性を加味し、褒めの相手を「同性で同年代の友人」とした。この設定に基づいて褒め言葉や返答例で用いたスピーチレベルはややくだけた [常体] で統一させた。

4. 分析

4. 1. 分析方法

分析はアンケート調査によって示された印象度と、フォローアップアンケートによる自由回答を対象とした定性的分析手法を採用した。印象度分析に関しては、返答表現を元の返答の分類カテゴリーに置き換え直し、褒めの対象となった項目と返答印象の関わりを焦点とした。また先行研究で示された日本語の褒めの返答傾向と本調査で示される返答印象度が比例するかどうか、曖昧さや謙虚さ、謙遜などの要素が褒め提示側に好印象を与えているのかについてもあわせて分析した。インフォーマントの属性分析に関しては、インフォーマント数の少なさから本調査では見合わせるが、明らかな属性差が確認できた場合には、随時指摘する。

4. 2. 分析基準 — カテゴリー分類

前項 2. 2. で述べたように、褒めの返答がカテゴリー分類されている実証的な研究には、米語研究として Herbert (1990)、ニュージーランド英語研究として Holmes (1987, 88)、日本語研究として横田 (1985)、丸山 (1996)、寺尾 (1996) がある。このうち横田 (1985) は褒めの返答の第一声を 3 カテゴリーに分類した後、返答に付け加えられた「付加文」をさらに 6 分類²⁴⁾して分析対象とする独自の方法をとっている。これに対し、丸山 (1996) は Herbert (1990) のカテゴリー分類を、寺尾 (1996) は Holmes (1987, 88) のカテゴリー分類を基本採用している。

Holmes (1987, 88) と Herbert (1990) の主な相違点は、12 の下位区分がそれぞれ属する大カテゴリーの基軸にあり、前者が褒めの [受容・拒絶・逸らし] を軸としているのに対し、後者が褒めの [肯定・否定] を軸としている。しかし基軸が異なるものの、それぞれの下位区分の内容はほぼ共通するものになっている²⁵⁾。このため大カテゴリーや下位分類の分類名称に若干のずれは見られても、実際の返答ストラテジーに対する分類はほぼ同質と判断した。本論のアンケート調査作成においては、Herbert (1990) と Holmes (1987, 88) に見られる 12 下位分類を参考にした上で、論者の内省を合わせた独自の 17 分類カテゴリーを作成した。これは本調査が Herbert (1990) と Holmes (1987, 88) と異なり、褒め提示側が抱く返答例への

印象や好感度を調査・分析の対象としているということに起因している。両 12 下位分類と本論におけるカテゴリー差は、① [情報的コメント (informative comment)] における「情報」を、褒められた対象項目に対して肯定的／中立的／否定的なものとして区別したこと、② [格付け (question accuracy / qualifying)] を独立させ、中立的格付け／否定的格付けに区別したこと、③ [比較・低評価：褒め手 (或いは一般) と比較して、自らを低く評価する] という新たな項目の追加を行ったことによる。以下に Herbert (1990) と Holmes (1987, 88) のカテゴリー分類差を比較させた表と、本論で分析の基準とする 17 カテゴリーについて記す。17 カテゴリーについてはカテゴリー番号の数字の小さな方が褒めの受容レベルが高く、数字が大きくなるにつれて受容レベルが下がるよう、基本配列されている。尚、本論で分析に使用する返答カテゴリーは、褒めの [受容／保留・中立・曖昧・回避／拒絶] の順で並べられているが、その 3 カテゴリーの境界は必ずしも明確なものでなく、したがって受容 (肯定) 型／拒絶 (否定) 型／保留 (回避) 型などの 3 カテゴリー対立として扱わず、あくまでも 17 のカテゴリーを比較の対象とする。

表 2：カテゴリー分類の差 (Holmes (1987, 88) と Herbert (1990))

Holmes (1987, 88)	Herbert (1990)
1. ACCEPT Appreciation/Agreement token Agreeing utterance Downgrading/Qualifying utterance Return compliment	1. AGREEMENT Acceptance Appreciation token Comment acceptance Praise upgrade Nonacceptance Comment History Reassignment Return
2. REJECT Disagreeing utterance Question accuracy Challenging sincerity	2. NONAGREEMENT Scaledown Question Disagreement Qualification No acknowledgement Request interpretation
3. EVADE / DEFLECT Shift credit Informative comment Ignore Legitimate evasion Request reassurance/Repetition	

【17 返答カテゴリー提示】

① 同意 ①-1：基本形 ①-2：「気に入っている」 ①-3：同意根拠提示

- ② 感謝 ②-1：基本形 ②-2：躊躇後の喜び表出 ②-3：躊躇後の感謝表出
②-4：感謝後の安堵
- ③ 情報コメント付加（肯定的コメント）
- ④ 達成・獲得努力表出
- ⑤ 控え目な同意 ⑤-1：基本形 ⑤-2：「だけ」の強調 ⑤-3：他部分否定
- ⑥ 褒め返し（褒めを肯定した上での）例：「あなたのもかわいいね。」
- ⑦ 他者（人物・物）への褒め逸らし ⑦-1：基本形 ⑦-2：控え目な褒め逸らし
- ⑧ 保留・確認
- ⑨ 情動的コメント付加（中立的コメント）
- ⑩ 的確さへの疑問と格付け：褒められた表現を言い換えて中立的な表現にする
- ⑪ 同コンテキスト内における話題転換：同じコンテキスト内で相手に話題を振る
- ⑫ 冗談 ⑫-1：基本形 ⑫-2：FTA の可能性を持つ「冗談」
- ⑬ 意図への疑い
- ⑭ 無視・コンテキストの逸らし ⑭-1：基本形 ⑭-2：小規模の逸らし
- ⑮ 情報コメント付加（否定的コメント）
- ⑯ 比較・低評価 ⑯-1：相手を自分と比べて上にする
⑯-2：自分を相手と比べて下にする
⑯-3：自分を一般と比較して低評価し、第三者をより高く評価する
- ⑰ 褒めの否定 ⑰-1：基本形 ⑰-2：強い否定
⑰-3：低評価への訂正による褒めの間接否定

4.3. 作業仮説

先行研究で褒め返答傾向を参考に、以下の作業仮説を作成した。

- (1) 褒めに対して回避・保留・曖昧傾向の返答は褒め提示側の印象が良い。
- (2) 謙虚さが表われている返答は褒め提示側の印象が良い。
- (3) 謙虚度の上昇と共に褒め提示側の印象は良くなる。
- (4) 褒めの返答に対する印象度は褒めの対象項目によって異なる傾向を持つ。

褒めの返答と謙虚さとの関係については、前項 2.2.1.2. で述べた熊取谷 (1989) の「誉めにおける拮抗状態の打開策」を参照した結果、17 カテゴリーにおける⑤～⑰にある一定の謙虚さが認められるものと判断する。尚、カテゴリー番号については基本的に番号が大きくなるとその謙虚度も増すものと捉える。

5. 結果

5.1. 全体傾向

褒めの返答に対する印象度調査において、褒めの全対象項目を通し最も印象が良いと評価

されたのは、褒めに対する素直な同意や喜びの表出・感謝であり、褒めの受容度が高いカテゴリであった。また褒めへの控え目な同意や褒め返し、第三者への褒め逸らしなどは、比較的印象の良いストラテジーであると評価された。一方、最も印象が悪いと評価されたのは褒めの意図への疑いや褒めコンテキスト自体の逸らし、これに褒めの否定が続き、褒めを率直に受け取らずに評価を保留するものや褒め自体を回避するものなど、褒めの受容度も比較的低いカテゴリが揃った。その他の回避・保留傾向の返答も比較的印象の悪いストラテジーと評価された。つまり褒めの受容度が比較的高いストラテジーの方が、受容度の比較的低いストラテジーよりも好ましく受け入れられているという結果と言えるだろう。また感謝や喜びの表出に対する好感度の高さ、意図への疑いやコンテキストの逸らしに対する好感度の低さは、「褒めている」という褒め手の働きかけ自体が褒めの相手に素直に受け止められることの重要性を同時に示していると言える。このことは調査後に行ったフォローアップアンケートにも明確に表れた（フォローアップアンケートに関しては後項 5.3. 参照）。このような印象傾向を基調としながらも、褒めの対象項目や状況設定によって返答の印象度に差が見られた。以下に項目ごとの分析を行う²⁶⁾。

5.2. 項目別傾向

(1) 所持品（外見）に対する褒め：「コート」

この状況設定は「学校や職場での所持品褒め」という日常生活において比較的頻度の高い状況例である。所持品や外見に関する褒めは日常的に褒めの対象としてよく選ぶ項目であると、予備調査やフォローアップアンケートの支持を得た。この項目への褒め返答において最も印象が良いとされたのは感謝の表出 (②-1) であり、21 人中 19 人が「印象が良い」「大変印象が良い」と答えた。また喜びの表出 (②-2) や「自分も気に入っている」という同意 (①-2) も、多くのインフォーマント間で「印象が良い」「大変印象が良い」とされ、この 2 カテゴリ 3 分類に「印象が悪い」「大変印象が悪い」と答えた者は一人もいなかった。これらに続いて比較的好印象で返答として無難と思われるカテゴリ²⁷⁾に褒め返し (⑥)、達成努力表出 (④)、第三者への褒め逸らし (⑦-1) などがあつた。一方、比較的悪い印象を与える可能性が高いと思われるカテゴリ²⁸⁾に「そう？」に見られる保留・確認 (⑧) があげられた。最も印象度の悪い返答として評価されたのは FTA の可能性を持った冗談 (⑫-2) で、21 人中 19 人が「印象が悪い」「大変印象が悪い」と答えた。これに続いて印象が悪い傾向にある返答は意図への疑い (⑬-1) と褒めの否定 (⑰-1) で、両者ともインフォーマントの半数近くが「印象が悪い」「大変印象が悪い」と答えた。3 カテゴリともやはり「印象がよい」以上の評価をしたインフォーマントは一人もいなかった。インフォーマント間で評価の分かれるカテゴリには、肯定的な情報コメントの付加 (③)、褒められていること以外を否定した控え目な同意 (⑤-3)、自分と比べて相手を高く評価する返答 (⑯-1) があり、これらのカテゴリでは与える印象に差が生まれていることがわかつた。

表 3-1：所持品（外見）に対する褒め 「そのコート，きれいな色だね。」

性別	返答 1-2	返答 2-1	返答 2-2	返答 3	返答 4	返答 5-2	返答 6	返答 7-1	返答 8	返答 9	返答 10	返答 11	返答 12-2	返答 13-1	返答 15	返答 16-1	返答 17-1	米国滞在経験
女 1	◎	○										△	△	▲		△	△	2年
女 2	○	○	○		○	○		○				△	△				△	1年
女 3	○	○	○			△					△			△				1年
女 4	○	○		○					△		△		△		△	△	△	*
女 5	○	○		○	○	△		○				△	△					*
女 6			○	▲		△	◎	○	△			○	▲		○	○	△	*
女 7	○	○	○	○			○						△	▲		△	△	*
女 8	○	○	○	○	○				△				△	△	△	△	△	*
女 9		○	◎			▲	○						△	△		△	△	*
女 10	○	○	○			△	○						△			○		*
女 11	○	○	○		○	○		○		○	○		△					* 英1年、 独1年半
女 12	○	○	○	○	○	△	○	○	△	○			△			△		* 中国6年
男 1		○	○			△	◎	○	△				▲	△				1年
男 2	○	○	○	◎		○							▲	△			△	*
男 3		○	◎			○							▲	△		△		*
男 4	◎	◎	○	○	○	○	○	○	△				△			△	▲	*
男 5	○		○										△					*
男 6	○	○	○			○	○					△	△	△		○		*
男 7		○		△		△		○			△		△				△	*
男 8	○	○	○			○							▲			○		*
男 9	◎	○									△		△	▲		△	△	*

＜褒めの返答に対する，提示側の印象度データ＞

(◎「大変印象が良い」，○「印象が良い」，△「印象が悪い」，▲「大変印象が悪い」)

褒めの提示側は相手が基本的に褒めを受け入れ、喜んだり感謝を表出したりして褒めを肯定することを願っており、褒めの意図を疑問視して提示側が異なる理由で褒め行動を行っているとは邪推するような返答や褒めの否定に対しては良い印象を抱いていない。「コート」のような所持品・外見に対する褒めは、自画自賛を気にして謙遜するほど負担の大きな褒めではないと解釈され、その結果として過度の否定は勿論、謙虚さが逆に仰々しく捉えられているのであろう。「褒めた」という働きかけ自体を素直に喜んでもらいたいという提示側の願望が、このような印象度傾向に表われたと推測できる。自分より相手を高める謙遜のストラテジーに対する好感度が低いことも、褒められた対象物の獲得苦労表出に対して、比較的好印象が持たれていることも、意図への疑いが最も好まれない返答であったことも、この状況下で褒め提示側が最も重視することが褒めの働きかけ自体への認知・受容願望であることを実証している。

(2) 技術・能力に対する褒め 1：「写真・写真技術」

(2) は相手の技術や能力を褒める状況である。能力や技術に対する褒めは (1) の外見や所持品への褒め同様、日常的に褒めの対象とすることの多い項目として支持を得た。この項目において最も印象が良いとされた返答は喜びの表出 (②-2) で、21 人全てのインフォーマントが

表 3-2：技術・能力に対する褒め 1

「写真撮るの、うまいんだね。これなんか、すごくいいじゃない。」

性別	返答 1-1	返答 2-1	返答 2-2	返答 3	返答 5-1	返答 5-3	返答 6	返答 7-1	返答 7-2	返答 11	返答 13-1	返答 14-1	返答 14-2	返答 16-1	返答 17-1	返答 17-2	米国滞在経験
女 1		○	◎	△		△				△	▲	△		△		△	2年
女 2	○	○	○	○	○			○	○								1年
女 3		○	○								△						1年
女 4	○	○	○	△	○	△	○					△	△				*
女 5	○	○	○		○						△						*
女 6	△		◎	▲			○	○	◎			△					*
女 7	○	○	◎		○	○		○			△	△			○		*
女 8	○	○	○		○		○		△		△	△					*
女 9	○	○	◎		○		○			○		▲					*
女 10	○	○	○									△		○			*
女 11	○	○	○	△	○	○	○				△	△				○	*英1年独1年半
女 12	○	○	○		○	○		○				△	○	△		△	*中国6年
男 1	○	○	○		○		◎			○	△	▲		○			1年
男 2	◎	○	○								▲	△				○	*
男 3		○	○	△	◎						△	△	△	△		▲	*
男 4	○	○	○	○	○		◎	○						○	▲	○	*
男 5	○		○									△					*
男 6	○	○	○			△			△	△	△	△	△				*
男 7	○	○	○	△	○	△	○	○	○		△	△	△				*
男 8		○	◎			○				△		△	△		○		*
男 9	◎	○	◎	△	○				△		△	△		△	○	△	*

好印象と評価し、その内「大変印象が良い」と答えた者が6人であった。これに続いて良いとされたのは感謝の表出(②-1)で19人が「印象が良い」と答えた。同意(①-1)も感謝の表出とはほぼ同様の印象度ではあるが、インフォーマントの間で若干印象度に差がみられ、「印象が悪い」と答えた者も1名見られた。比較的無難なストラテジーとして挙げられるカテゴリの中では控え目な同意(⑤-1)が最も印象度が高く、続いて褒め返し(⑥)、褒めの逸らし(⑦-2)が挙げられる。控え目な同意の中でも⑤-3のように他の部分を否定して、褒められた部分だけを受容する方法は、(1)と同様にインフォーマントによって印象度に差の出るカテゴリとなり、他に肯定的情報コメントの付加(③)、弱い褒め逸らし(⑦-2)、褒めの否定(⑩)、同じようなコンテキストで相手に話題を振る(⑪)等も印象度に差が見られた。また最も印象の悪い返答カテゴリはコンテキスト逸脱(⑭-1)で、これに意図への疑い(⑬-1)が続いた。能力や技術に対する褒めも外見や所持品褒めと同様に、褒めの受容度の高いカテゴリが好まれるが、喜びの表出が全インフォーマントに好まれたことは注目に値する。謙虚さの関連する返答に関しては、控え目な同意が比較的良好な印象を得ている点や、褒めの否定がインフォーマント間で印象度に差が出る程度に留まり、印象が悪い傾向の返答とまでは扱われていない点が(1)との違いである。

技術や能力の褒めにおいては、褒めの提示側は相手に「褒めた」という働きかけを認知してもらい、その働きかけ自体を素直に喜んでもらいたいと思っている反面謙遜を嫌うことも

なく、控え目な印象を与える部分同意 (⑤-3) や褒め返し (⑥)、第三者への褒め逸らし (⑦-1) 等は逆に好感を持って捉えられる傾向にある。これは褒められたことに対する受け手の謙遜が、褒めの項目によって評価を異にすることを意味していると言える。無論、自画自賛や褒めの働きかけ自体への侵害は好まれておらず、この点は (1) と共通している。

(3) 所有物に対する褒め：「部屋」

褒め返答に関する先行研究では所持品と所有物の間に意味差をもたせ、異なるカテゴリーで分析が行われているものは見られなかったが、本論では所持品に関する褒めと所有物に対する褒めを別のレベルで捉え、印象度がどのような差を見せるのかにも注目した。所有物褒めにおいて最も好まれた返答カテゴリーは同意 (①-2) で 18 人が「印象が良い」以上の評価を、内 5 人が「大変印象が良い」と評価した。これに続いて好感度の高かったカテゴリーが控え目な同意 (⑤-3) で、この点は (1) や (2) と傾向を異にしている。また比較的印象の良い無難なカテゴリーとしては躊躇後の感謝表明 (①-2)、達成努力表明 (④) があげられ、基本的には (1) の場合と同様に褒めの受容レベルが高いカテゴリーが印象度を高くしているが、「ためらい」や「控え目」といった謙虚さにまつわる要素が印象の良さに繋がっていることが所持品褒めと若干異なる部分である。所持品と所有物とでは物理的な大きさの違いや経済的価値差、これに付随する獲得の決断に関しての所持者の負担が異なるため、褒めの受容に際して求められる謙虚さも異なってくると推測できる。褒めの否定のカテゴリーに対する印象度の

表 3-3：所有物に対する褒め 「眺めのいい部屋だね。」

性別	返答 1-2	返答 2-1	返答 2-3	返答 3	返答 4	返答 5-3	返答 7-1	返答 8	返答 10	返答 11	返答 13-1	返答 14-2	返答 15	返答 16-1	返答 17-1	返答 17-9	米国滞在経験
女1	◎	○	○		○	○					▲						2年
女2	○				○	○								△	△	○	1年
女3	○	○	○						△		△						1年
女4	○		○	○	○	○			△		△			△	△	○	*
女5	○	○		○	○				△		△		△			△	*
女6	◎	○		▲		○			▲	◎		○	○			○	*
女7	○	○			○	○					△	△	△	△		○	*
女8	○	○		○	○	○					△	△	△				*
女9	◎		○			○			▲	○		△	△			○	*
女10	○	○								○				○			*
女11	○	○	○	○	○	○	○		△		△				△	○	*英1年、独1年半
女12	○	○	○	○	○	○	○		○	○				△			*中国6年
男1	○	○	○				○	△	△	◎	△	△					1年
男2		○	○														*
男3		△				◎	▲		△						△		*
男4	◎	○	○	○	○	○					○			△	▲		*
男5		○	○									△					*
男6	○	○	○		○	○			△		△	△	△				*
男7	○			○	○	○			△		△				△		*
男8	◎	○				○			▲				△		△	○	*
男9	○					◎	△	△			△	△		△	▲	○	*

みを比べても、(1) の所持品の場合と (3) の所有物の場合とでは (1) の方が印象度が低い。ただやはり共通するのは褒めに対する受容を回避・保留・曖昧にするものや褒めに対する否定的な見解への印象が悪く、褒めの提示側は所有者が所持・所有する物に対する褒めを受け入れないことに対して、あまりいい印象を抱かない傾向にあるという点である。最も印象の悪い返答カテゴリーは的確さへの疑問 (⑩) と意図への疑い (⑬-1) で、褒めの言葉を単なる「批評」のように捉えて評価訂正したり、褒めの意図を疑問視して働きかけを穿って捉えるものは、項目差を越えて好印象を与えない返答であることも示された。

(4) 努力に対する褒め：「毎朝の水泳の継続」

褒めの対象として選ばれやすい項目には所持品（外見）／所有物／技術・能力の他に、努力や性格など相手の人間性にかかわる項目もみられた。この予備調査結果を受けて本調査では「努力（継続性）」に対する褒めを設定し、インフォーマントに返答印象をあげてもらった。最も好まれた返答カテゴリーは褒め返し (⑥) であり、感謝や同意を抜いて最も好印象と評価された。これに続いて喜びの表出 (②-2)、冗談 (⑫-1) が印象が良いと評価された。また比較的印象の良い無難な返答には控え目な同意 (⑤-2) や肯定的 (③)・否定的 (⑮) 情報コメントの付加、第三者への褒め逸らし (⑦-1) などがあげられ、項目による返答印象の違いを明確にした。褒め返しや冗談の使用には褒められたことをきちんと認識したことを相手にわからせ

表 3-4：努力に対する褒め「毎朝ジムで泳いでるの？ よく続くねえ、すごいね。」

性別	返答 1-1	返答 1-3	返答 2-1	返答 2-2	返答 3	返答 5-2	返答 6	返答 7-1	返答 8	返答 9-14	返答 10	返答 11	返答 12-1	返答 13-1	返答 15	返答 16-2	返答 16-3	返答 17-2	米国滞在経験
女1	○			○			○	○		△	△		◎	▲		△			2年
女2	○	○	○	○	○	○							○						1年
女3		△		○									○	△					1年
女4	○	○	△		○	○	○	○				○	○	△	○				*
女5	○		○	○										△					*
女6		▲		○	△	○	○	◎	△		△		◎		○		○		*
女7	○		○	○			○					○	◎		○			○	*
女8			○	○	○		○			○	△		△	△	○			△	*
女9				○		○	○	○	△	○		○		△			○		*
女10		○	○				○						○					○	*
女11	○	○	○	○	○	○	○			○	△		○	△	○			○	*英1年、 独1年半
女12	○	○	○			○				○			○		○	△	○		*中国6年
男1			○	○			◎			△		○	○	△					1年
男2	○		◎	○		○								△					*
男3	○	▲					◎				△			△		△			*
男4	○		○	○	○		○	○		▲			○		○	○		△	*
男5			○	○									○						*
男6	○						○							△	△				*
男7	○				○		○						○					○	*
男8	○		○	○			○			△	△								*
男9	▲	△		◎			○				△			▲				△	*

た上で話の焦点を自然に変えていく、という共通要素がある。これは「努力」という項目が技術・能力への褒めと同様またはそれ以上に受け手の内面性への褒めにつながる項目であり、自身の内面性という根幹的褒めに対して同意・肯定することが、所持品や所有物への褒めの場合と比べて、より自画自賛的に響く可能性を示唆している。事実、所持品や所有物への褒めへの否定と能力・技術や努力に対する褒めへの否定とでは、明らかに後者の好感度が高く、⑮～⑰の3カテゴリーにもその傾向は明らかである。⑯-3に至っては褒めの否定より他の者を褒める謙虚さが効果的に働き、褒めの否定傾向にあるカテゴリーにしては珍しく、無難な返答カテゴリーとして認識されている。このような調査結果は、受け手の内面性と褒めの対象項目との距離関係が褒めの返答印象度に影響していることを示唆している。最も印象の悪い返答カテゴリーは前項目同様、意図への疑い(⑬)と褒めの的確さへの疑問(⑩)となっており、ここでも「褒め」の働きかけ自体に対する素直な認知が提示側に要求されていることを裏付た。

(5) 技術・能力に対する褒め2：「料理」 — お世辞の要素とのかかわり

最後に褒めの状況設定にお世辞の要素が関わる場合について検証したい。相手から何か利益を得ている場合や、相手が何か自分に対して良い働きかけを行ってくれている場合、人は状況によって褒めを自分の本音以外の部分で発することがある。これが「お世辞」と呼ばれるものである。通常褒めの言語行動においては、褒められた人間は褒めの言葉がお世辞であるか否かをその場の状況や人間関係、言葉のニュアンスから判断し、これに応じた返答を行っているとは推測される。ここでは(1)～(4)と異なり「お世辞でも褒めることが必要かもしれない」という発想が褒め手に多少なりとも働くよう設定し、返答印象に差が生まれるかどうかを調査・分析した。「友人(受け手)の部屋に招かれ、ごちそうになった」という共通認識と、褒めのお世辞的解釈が褒め手と受け手の両者間で可能な状況設定である。

この条件下の技術・能力褒めにおいて最も印象の良い返答カテゴリーは感謝(②)であり、群を抜く結果が得られた。感謝の中でも感謝後の安堵(②-4)の好感度は特に高く、全インフォーマントから「印象が良い」以上の評価がなされた。また純粋な感謝(②-1)や躊躇後の感謝(②-3)の場合も、19人に「印象が良い」以上の好感度を得た。比較的印象がよい無難な返答としては、控え目な同意(⑤)、褒め返し(⑥)、第三者への褒め逸らし(⑦-1)などがあげられ、いずれも褒めの働きかけ自体を受けとめた上で謙虚に応えるカテゴリーと言える。またインフォーマント間で印象に差が出た返答カテゴリーとしては、同意根拠提示(①-3)や達成努力表出(④)、褒めの否定(⑰-1)があげられ、印象の悪い傾向にある返答としてはコンテキストの逸らし(⑭-1)や否定的評価による間接否定(⑰-3)がこれに続き、最も好ましくないと判断された返答カテゴリーはFTAの可能性を持った冗談(⑫-2)となった。この返答に対しては20人中18人が「印象が悪い」以下の評価をし、内5人が「大変印象が悪い」と評価した²⁹⁾。褒めの同意・拒絶はどちらも好感度に結びつかなかった。

表 3-5：技術・能力に対する褒め 2（お世辞的要素含む）

「どれもおいしいねえ。料理，上手だな／ね。」

性別	返答 1-3	返答 2-1	返答 2-3	返答 2-4	返答 4	返答 5-1	返答 5-2	返答 6	返答 7-1	返答 8	返答 12-2	返答 13-1	返答 13-2	返答 14-1	返答 14-2	返答 15	返答 16-3	返答 17-1	返答 17-3	米国滞在経験
女 1		○	○	◎		○				○	▲	△	△	△					△	2年
女 2	○	○	○	○	○		○		○		○									1年
女 3			○	○					○		△	△								1年
女 4	○	○	○	○	○			○	○		△				○					*
女 5	○	○	○	○				○			△								△	*
女 6	△			○	△		○		◎	△	▲		△	△	△	▲			△	*
女 7	○	○	○	○	○	◎		○	○		△	△	△							*
女 8	○	○	○	○		○	○	○	○		△	△		△				△	△	*
女 9		○	○	○				◎			▲			△				△	△	*
女 10	○	○	○	○				○			△	△	△	△						*
女 11	○	○	○	○		○	○	○	○		△	△	△	△						*英1年、 独1年半
女 12	○	○	○	○	○	○	○	○	○		△			△	○	○	△			*中国6年
男 1		○	○	○	○	○		○				△	○	△		△				1年
男 2	◎	○	○	○	○						△								▲	*
男 3		○	◎	○	△						▲			△			△		△	*
男 4	△	○	○	◎		○	○	○	○		△			▲		○	△			*
男 5	○	○	○	○		○								△					△	*
男 6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*
男 7		○	○	○	△	○		○					△	△						*
男 8		○	○	◎							△			△					△	*
男 9	△			◎		◎			△		▲			△			▲	◎		*

感謝という形の褒めの受容や、控え目な同意・褒め逸らし・褒め返しに見られる控え目な態度が好まれた要因は、やはり褒めの状況設定が持つ「お世辞」解釈の可能性と深い結びつきがあると推測される。状況は単純な褒め行動であるという解釈が出来ると同時に、「ごちそう」されたために起こった褒め — つまり「お世辞」の要素を持つと解釈可能である。受け手にこの認識があれば、受け手は褒めが待遇配慮に起因している可能性を無視できないはずである。このような状況下で「褒めの受け手は提示された褒めを受け、褒めてくれたという相手の配慮に応える（感謝する）返答をする」ということが最も求められている。素直な感謝や喜びの表出／安堵の表出は、褒めの提示側に対する受け手の待遇配慮返しになり、円滑なコミュニケーションを維持・発展できる。場合によっては自画自賛に響き、且つお世辞の可能性を無視したとも受け取れるような同意根拠提示や、場合によってはお仕着せがましく聞こえる達成努力表出、また褒めの働きかけに対する感謝があまり感じられず、同時に本音であるとは受け取りにくい褒めの否定は、必ずしも褒め手に対する待遇的配慮がされていると言えず、解釈のされ方に明らかな幅を持つ。また(2)や(4)で指摘した謙虚さに対する好感度がお世辞解釈の可能性によってさらに加速し、⑤～⑦に見られる褒めの間接的受容と待遇的配慮の性質に対する好感度が高くなっている。(2)や(4)ではインフォーマントによって印象度に差がみられた⑤-3や⑦においても、(5)においては「印象が悪い」「大変印象が悪い」と応えたインフォーマントは殆ど確認されなかった。

5.3. フォローアップアンケート

調査票回収後に行ったフォローアップアンケートに寄せられた、褒めの返答に対する印象を決定する要素は、本調査で得られたデータ全体傾向と合致するものとなった。これによれば印象が良い／好ましいと判断される返答は褒めを素直に喜んだり感謝しているもの、褒めによって働きかけられたコミュニケーションを続けようとしているもの、褒めを受けた上で自分に話題を振ってくれるような待遇レベルの高いものであり、褒めの受け手に「素直さ」「率直さ」、コミュニケーションへの「誠実さ」が求められていることが明らかになった。反対に印象の悪い／好ましくないと判断される返答にはこれらの要素を持ち合わせていないと思われる返答が多く、過度に謙遜するものや完全に褒めを否定するもの、話を逸らすもの、褒めの意図を疑うもの、また働きかけられたコミュニケーションを続けようとせず、会話を切ってしまうようなものが挙げられた。「調子に乗って自慢する」ような返答や、「取って付けたような」褒め返しの返答なども、好まれない項目として抽出された。

5.4. 「謙虚さ」表出の効果 — 米語での解釈と比較して

褒めの返答に表された受け手の「謙虚さ」は、提示側に効果的に働いているのだろうか。各項目ごとの返答印象を検証した結果、謙虚さの評価は褒めの対象項目によって異なり、またその謙虚さのレベルが印象度に大きく関係していることが本調査のデータの範囲内で示された。前項 4.3. の通り、褒めの否定 (⑱) を最も謙虚度の高いものとし、以下⑤までをある一定の謙虚さが感じられるカテゴリーとして捉えてみると、謙虚度の高さは印象度の高さに全く比例しておらず、印象の良い返答／比較的印象が良い無難な返答／人によって印象度に差が出た返答、明らかに印象が悪い返答の全てにばらついた。しかし一つ言えるのは、謙虚さを表出する際に褒めに対して基本的な受容姿勢を見せ、その上で褒め返しをしたり第三者への褒め逸らしをしたり、或いは控え目に同意するという場合の印象度は、項目差を越えて好印象を与える傾向にあるということであり、逆に褒められたという働き自体に対して応答しないで褒めを保留・回避したり、褒めをそのまま受容しない謙虚さは持ち合わせていても褒め自体の意図を疑ってかかる返答方法は相手への FTA になる可能性が高く、褒め提示側に与える印象が悪い。言い換えれば、謙虚さへの評価は「褒め」という相手からの働きかけ自体に対して面と向かって応じたか否かを基調としており、その上で肯定的にも否定的にも評価される要素と言える。無論前項 5.2. の通り、褒めの対象項目によって謙虚さの好まれ具合は異なる。所持品への褒めと所有物への褒めを比べれば後者が、また技術・能力や努力に対する褒め — すなわち褒めの受け手の内面性にかかわる褒めが返答に適度な謙虚さが付随することを好み、褒めの否定でさえも極度に嫌がられないという結果を示している。これには褒め対象項目の持つ特性自体が影響している。

次に自分と比較して相手を高く評価したり、相手と比較して自分の評価を低くするという

「へりくだり」に見られる「謙遜」の解釈について述べておきたい。褒めへの「へりくだり」に見る謙遜返答には、日米語間で解釈のされ方に差があるという先行研究の指摘があった(Sakamoto 1982)。日本語においてはこのような手法は謙虚さの表れと解釈されるのに対し、米語においては相手と自分の間の上下関係を明確にさせるという意味で「対等性の美德」に反すると解釈される。褒めの提示側に心理的な負担をかける極めて失礼な行為であるというのが米語運用上の解釈である。比較の形をとった謙遜 (⑯) は、Sakamoto (1982) が説明していたように本調査において褒めの提示側に高い印象度を与えていただろうか。前項で示されたように答えは否であり、このような比較謙遜の返答は印象が良いカテゴリーとして評価されていなかった。また完全否定 (⑰) の謙遜カテゴリーも同様にインフォーマントによって印象が異なる、或いは印象が悪い傾向の返答であると評価されている。

謙遜度の高い返答がインフォーマントにどのような解釈をされたかについては、フォローアップアンケートでも明らかであった。これによると褒めの提示側は受け手の過度の謙遜に対して「褒めの受け手が本音で話をしていない」という印象を持っている。つまり本当は思ってもいないのに、褒めを強く否定しているように聞こえるということである。返答の言語表現が受け手の本音に即したものであれば、受け手は自分が良いと思っていないものを身につけたり、褒め提示側にそれを見せたりしていることになり、そのような人間性自体に違和感や悪印象を抱く。逆に否定の返答が本音と裏腹ならば、受け手に率直さや正直さが欠けており、やはり好感が持てないという論理なのである。米語運用における解釈では、対等性の美德が破られることで褒め手に大きな心理的負担がかかり、これが「へりくだり」に対する低評価の原因とされた。日本語運用においてこのような論理を述べたインフォーマントは確認されず、一様に「そんな風に思っていないくせに」という真実みの欠如、誠実さ・正直さの欠如が挙げられていた。つまり本調査の範囲内においては、日本語での褒め行動が謙虚さよりも誠実さや素直さにプライオリティを置いていることが示された。無論この問題は、褒め手と受け手の両者間における地位差や親疎の問題と深い関わりがあり、褒めの相手や状況設定の異なる場合に謙虚さがどのような位置を保つかは推測し得ないが、本調査においては、謙虚であることよりもまず、褒め手からの働きかけを一度正面から受けとめる率直な態度やコミュニケーション自体への誠実さが褒めの返答に重要かつ根本的な要素であり、謙虚さが効果的に発揮されるか否かはこのような態度を褒め手が受け手に認めることが可能かどうかを基準としていることが示された。

6. 考察

日本語での褒め返答は直接的な返答を回避し褒めの焦点をぼかして曖昧に終わらせる傾向が強いと指摘されてきたが、本調査の結果、日本語母語話者にとって褒めの返答における「曖昧さ」はむしろあまり印象の良くない要素とされた。また褒めの受け手が自分がその褒

めに値しないという「謙虚さ」から保留・回避・曖昧ストラテジーを選択したとしても、提示側には「褒めてくれた」という提示側からの働きかけを喜んだり、感謝の意を表したりする態度こそがより好ましく評価された。日米語間で解釈が異なると指摘されてきた「謙遜」のストラテジーにも、あまり印象が良くない返答であるという評価が得られ、以上の結果から仮業仮説 (1), (2), (3) は否定された。また、褒めの返答に対する印象度は褒めの対象項目によって、主に謙虚さへの評価の面で異なり、作業仮説 (4) を立証するに至った。勿論本調査は小規模でインフォーマントの数やその年代層も限られており、褒めの対象を「同性の同年代の友人」に限定したものであるが、ここにかつて「謙遜の美德」と言われた価値観の変化の一端を見ることもできよう。謙遜が謙虚さに由来していると解釈出来た上でさえ、「褒めた」という働きかけを素直な喜びや感謝で受容してもらいたいという褒め提示側の願望の方が優先されているという結果は、[謙虚さ] よりも [率直さ] [素直さ] に好印象が持たれていることを意味している。

無論褒めの返答印象が未だに詳細に調査されていない他要因と深い関係を持っている可能性も充分にある。Bachnik (1990) は日本人について、相手と親しければ形式を無視した行動パターンを取り、親しくなければ形式を重視した行動パターンを取ると述べている。ここでいう「形式」とは「礼儀」「社会的な快適さを守ること」と言い換えてよいだろう。米語によるコミュニケーションでは、相手との親疎関係に関わらず、フランクにフレンドリーにすることが礼儀である (Sakamoto 1982)。¹⁾ ‘politeness’ という言葉の構成要素について調査した Ide et al. (1982) においても、米語では ‘politeness’ という語に friendliness の概念が含まれているという認識傾向があることが明らかにされている。気さくな雰囲気を相手との間に作るものが礼儀である文化や社会もあれば、そうでない文化や社会もある。「褒め」が文化・社会の持つ価値観を反映している行動だとすれば、褒め手と受け手の親疎関係が褒めの返答傾向に影響を及ぼすと考えるのが妥当であろう。インフォーマント間の親疎関係を均質化することはデータサンプリングにおいて極めて困難であるが、今後研究対象とされるに充分の余地がある。最後に本調査は非言語的情報（表情、イントネーション等）を含まない、言語情報のみから受ける印象度を調査しており、コミュニケーションにおける非言語情報の情報伝達能力の大きさから鑑みて、実際の会話においてインフォーマントが同様の印象を受けるかどうかは定かではなく、前述の考察があくまで本調査方法の範囲内に限り有効であること、これを一般化するものではないことを述べておきたい。

注

- 1) 印象形成の研究は社会心理学の分野で歴史が長いですが、言語学においては研究の対象としてあまり扱われていない。
- 2) Herbert (1990: 209) 参照。
- 3) Wolfson (1983: 87-90) 参照。

- 4) 熊取谷 (1989: 98-99) 参照。
- 5) Pomerantz (1978)、Manes (1983)、Wolfson (1983)、Holmes (1987, 88)、Herbert (1990)、熊取谷 (1989)、小玉 (1993)、田辺 (1996)。
- 6) 本論における「印象度」とは、褒め提示側が褒めの返答から受ける「印象や感じの良し悪しの度合」を指す。したがって、「印象度の高い」返答とは提示側にとって「印象が良い」「感じが良い」返答と同義となる。
- 7) 宇佐見 (2001)はポライトネスを有標と無標に分けた上で、無標ポライトネスを「守られていて当たり前前のことを満たしている、失礼のない発話、及び、その集合体としての談話の状態」と捉えている。言い換えれば、牧野 (1978) は「褒め」と「謙遜」の組み合わせられた談話状態が、日本語での褒めの言語行動において無標ポライトネスが守られている状態であると主張している。
- 8) 東 (1994: 124-129) 参照。
- 9) 同じくアンケート調査を用いて日米の褒め返答を調査した横田 (1996) にも、寺尾の結果と同様な傾向があらわれている。
- 10) 褒めの否定や逸らしが心理的葛藤の結果でない場合、その否定や逸らしは褒め手からの働きかけが受け手にとって過度の親密さを感じさせるものであり、心理的不快感を呼ぶ物であったことの影響である、つまり褒めが FTA (Brown & Levinson 1978) になった可能性の表れだと Holmes (1987) は主張している。また Manes (1983) は褒めの返答としての感謝 (ex. Thank you.) は、褒めの受け入れでありながら明確な肯定をしていないため、心理的葛藤を減少させることのできる返答ストラテジーであると説明している。
- 11) To emphasize your own inferiority is polite in Japan, but it is not polite in English. (Sakamoto 1982: 5)
- 12) Manes (1983) は米語の褒め返答ストラテジーに関して、褒めの無視 (ignore) が褒めへの否定や拒否と同価であるとしている。
- 13) Wolfson (1983: 83) 参照。
- 14) Holmes (1987: 496-497)、Holmes (1988: 454-456) 参照。
- 15) 熊取谷 (1989: 99-101) 参照。
- 16) It is interesting, too, that what are complimented generally in our society are aspects of personal appearance which are the result of deliberate effort, not simply natural attractiveness....the verb "look" that the state is not permanent, that it may in fact be the result of deliberate effort. (Manes 1983: 99)
- 17) In our society, newness is undoubtedly the most important....new acquisitions regularly elicit compliments. (Manes 1983: 99)
- 18) Apparently, in our society, talent ranks above hard work; one can deny talent by claiming that effort was involved, but the opposite is not possible. (Manes 1983: 102)
- 19) Manes (1983) は「外見」は特に女性に好まれることを指摘し、Wolfson (1983) は「能力」は男性に好まれることを指摘している。
- 20) ここで言う丸山 (1996) の地位差とは学年差のことであり、丸山は大学キャンパスという場においては年齢差より学年差が心理的優位度の差を表すと考えている。
- 21) [所持物・技量] と [外見・性格] のカテゴリー関係を【部分】と【全体】の関係で捉えてみることもできる。[所持物・技量] が褒めの受け手の部分的な事柄である一方で、[外見・性格] は受け手の全体的印象とより深く関連する要素であると言えなくもない。全体的な印象に対する褒

めが地位差のある関係の間で、また部分的な事柄に対する褒めが地位差のない関係の間で受け入れられやすいと読み替えるならば、褒めの返答の重さや質自体が褒めの対象項目によっても変化する可能性を考える余地はある。

- 22) ...it is the sex of the person offering the compliment that serves as a better predictor of compliment acceptance. (Herbert1990: 214)
- 23) Brown & Levinson (1978) は褒めが FTA (face-threatening act) としてみなされる可能性を示し、所持物や能力・技能に関する褒めが、褒め手からの妬みを暗に示して褒めの受け手の negative face を侵害することがあることを指摘している。また Herbert (1990) は男性の返答ストラテジーとして legitimate evasion (コンテキスト自体の逸らし) が多いことに着目し、これが男性によって褒めが FTA として捉えられている可能性が高いことの裏付けであるとしている。
- 24) 横田 (1985) は返答者の第一声を肯定・否定・回避の 3 カテゴリーに分類した後、それに続く付加文の傾向を 6 区分 (A ほめ言葉の追加、B ほめられたことに対する説明、C 話題の切り替え、D ほめことばの軽減、E ほめ言葉のお返し、F 冗談) に分類して、それぞれのカテゴリーを構成するストラテジーの具体性を明らかにしている。先行研究の多くが第一声のみを調査していることに対し、横田 (1985) が付加文を分析対象にしていることは、返答者の発話意図を明らかにする上で不可欠で評価に値すると考えるが、付加文と第一声のカテゴリーを総合的に判断して最終的なカテゴリー分類を行う方法をとるのではなく、付加文の分析があくまで付随的であること、また 3 カテゴリーに対して、共通する下位区分を規定している点については賛同しがたい。
- 25) Herbert (1990) は Holmes (1987, 88) とのカテゴリー差について言及している。— The categories of compliment responses proposed by Holmes (1988) and Herbert (1986, 89) are remarkably similar, although there is disagreement as to the relations among response types. (Herbert1990:223)
- 26) 褒めの各対象項目に用意された返答例は、17 の返答カテゴリー (35 下位分類) が言語化されたものであるが、全ての対象項目に対して 17 カテゴリー分の返答例は用意されていない。これは状況設定の自然さを優先させたために、設定に対して不自然なカテゴリーを対象から外したことも原因ではあるが、1 つの褒め言葉に対する返答例数の過多がインフォーマントに「アンケート疲労」を与えていることを予備調査段階で確認したためでもあり、状況想定 of 自然さとインフォーマント負担の両方に配慮した結果である。
- 27) インフォーマントのうち「印象が悪い」以下の評価を下した者がなく、「印象が良い」以上の評価をした者が半分以上であるカテゴリーを指す。
- 28) 「普通である」を基調印象にしているものの、「印象が悪い」と評価したインフォーマントが若干目立ち、且つ「印象が良い」以上の評価をした者がいないカテゴリーを指す。
- 29) (5) の状況設定の調査票記入に際して男性 1 名の不備が見られたため、データの対象から外した。

参考文献

- 東照二『丁寧な英語・失礼な英語 英語のポライトネス・ストラテジー』、研究社出版、1994 年。
- Bachnik, J. "Being in the group: spatio-temporal 'place' in Japanese social organization" In Boscaro, Gatto & Raveri (eds.) *Social Sciences, Ideology, and Thought*. New York: St. Martin's Press, 1990. pp.192-197.
- Herbert, R. K. "The ethnography of English compliments and compliment responses: A contrastive sketch"

- In W. Oleksy (ed.), *Contrastive pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins, 1989. pp.3-35.
- ____ “Sex-Based Differences in Compliment Behavior” *Language in Society* 19, 1990. pp.201-224.
- Herbert, R. K. & Straight, H. S. “Compliment-rejection vs. compliment-avoidance” *Language and Communication* 9, 1989. pp.35-47.
- Holmes, J. “Compliments and Compliment Responses in New Zealand English” *Anthropological Linguistics*, 1987. pp.485-508.
- ____ “Paying compliments: A Sex-Preferential Politeness Strategy” *Journal of Pragmatics* 12, 1988. pp.445-465
- Ide, S., B. Hill, Y. Carnes, T. Ogino, and A. Kawasaki “The concept of politeness; an empirical study of American English and Japanese” In R. Watts, S. Ide, and K. Ehlich (eds.), *Trend in Linguistic Studies and Monographs* 59. Berlin: Mouton DeGuyter, 1992.
- 川口義一、蒲谷宏、坂本恵「待遇表現としてのほめ」『日本語学』15-5、1996年、13-22頁。
- 小玉安恵「ほめ言葉にみる日米の社会言語学的価値観」『言語文化と日本語教育』6、お茶の水女子大学、1993年、22-35頁。
- 熊取谷哲夫「日本語における誉めの表現形式と談話構造」『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究(2)』広島大学教育学部日本語教育学科、1989年、97-108頁。
- 熊山晶久『水性文化と油性文化 日・米文化比較の基盤』大修館書店、1991年。
- 牧野成一『ことばと空間』東海大学出版会、1976年。
- ____ 『ウチとソトの言語文化学』アルク、1996年。
- 丸山明代「男と女とほめ — 大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語学的分析」『日本語学』15-5、1996年、68-80頁。
- Manes, J. “Compliments: A Mirror of Cultural Values” In N. Wolfson & E. Judd (eds.), *Sociolinguistics and language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House, 1983. pp.96-102.
- Maynard, S. K. *Japanese Communication: Language and Thought in Context*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1996.
- Pomerantz, A. “Compliment responses: Notes on the co-operation of multiple constraints” In J. Schenkein (ed.), *Studies in the organization of conversational interaction*. New York: Academic, 1978. pp.79-112.
- Sakamoto, N et al. *Polite Fictions*. Tokyo: Kinseido, 1982.
- 田辺洋二「ほめことばの日・英語比較」『日本語学』15-5、1996年、33-42頁。
- 寺尾留美「ほめ言葉への返答スタイル」『日本語学』15-5、1996年、81-88頁。
- 宇佐見まゆみ「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能 — 敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること — 『語学研究所論集』6、東京外国語大学外国語学部、2001年、1-29頁。
- 津田早苗『談話分析と文化比較』リーベル出版、1999年。
- Wolfson, N. “Compliments in Cross-Cultural Perspective” *TESOL Quarterly* 15, 1981. pp.117-124.
- ____ “An Empirically Based Analysis of Complimenting in American English” In N. Wolfson & E. Judd (eds.), *Sociolinguistics and language acquisition*. Rowley, MA: Newbury House, 1983. pp. 96-102.
- 横田淳子「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58、1985年、203-223頁。